倭国王も公認!?「纒向遺跡」の調査情報誌

纒向考古学通信

Vol. 7

≪発掘調査の概要≫

建物群東側の調査（纒向遺跡第180次調査）

1．はじめに

桜井市教育委員会では桜井市大字辻56番１において纒向遺跡の第180次調査を実施しました。この調査は平成20年度から行われている範囲確認調査の７回目の調査となります。今回も土地所有者や地元関係者の方々から多大なるご協力をいただきました。この場を借りて御礼申し上げます。

さて、今回の調査の目的は、これまでの範囲確認調査で検出した３世紀中頃以前（庄内３式期以前）の計画性が高い建物群（建物B、C、D）よりも東側の遺構の状況を確認することです。一連の範囲確認調査では初めてＪＲ桜井線の東側を調査することとなりました。調査期間は平成25年10月30日から平成26年２月24日までで、調査面積は205㎡です。

なお、出土遺物の整理作業を経ていないため、現時点で各遺構の厳密な時期決定を行うことは困難ですが、調査段階での所見に基づいて解説したいと思います。

写真１　これまでの調査地と今回の調査地の位置（上が北）

2．検出された遺構と遺物

主な遺構として、２棟の建物と溝、柱列を検出しています。調査地は現況で水田となっており、標高は約75.3ｍです。東西10.0ｍ、南北20.0ｍの調査区を設定しています。遺構検出面は浅く、標高はおよそ74.9ｍです。線路の西側より遺構検出面は約0.6ｍ高くなっています。

これまでの範囲確認調査では、第162次調査地や第166次調査地を中心に、複数時期の遺構面が存在することが確認されていますが、東にいくほど上部の遺構面を構成する整地層や包含層が薄くなることがわかっています。これまでの範囲確認調査地の東端にあたる今回の調査地では整地層は確認できず、遺構面は地山直上の１面であると考えています。ただし、調査区の南側の一部には黒褐色土で埋まった河道（ないし溝？）SX-1001があり、その上面でも遺構を検出しています。地山直上の遺構面と河道埋没後の遺構面は一体のものと考えています。非常に柱穴の数が多く、遺構密度が高い点は建物群を検出したＪＲ桜井線よりも西側の調査区とよく似ています。なお、出土遺物の大半は３世紀から４世紀（庄内式期から布留式期）のものです。

写真２　第180次調査区全景（上が北）

写真３　建物Ｆ柱穴の炭化材

（１）建物

建物Ｆ　東西２間（約3.4ｍ）かそれ以上、南北３間（約6.7ｍ）を数えます。一辺が0.4～0.6ｍ程度の隅丸方形の柱穴が多いようです。柱穴は遺構検出面から0.3～0.4ｍ程度の深さが残存していました。北東隅の柱穴のみ柱材の可能性のある炭化材が残っていました。炭化材が柱材であるとすると、柱は幅が約15～16cmの材を用いていると考えられます。一部の柱穴は３世紀後半（布留０式期）の土坑に壊されています。建物Ｆは真北に対しておよそ４～５°西に振っており、３世紀中頃以前（庄内３式期以前）の建物Ｂ・Ｃ・Ｄとほぼ平行していることや、中軸線を一致させることから、建物Ｂ・Ｃ・Ｄと共存していた可能性が考えられます。

写真４　建物Ｆと建物Ｇ（北西から）

建物G　南北２間（約4.2ｍ）をはかりますが、建物の大部分は調査区外西側へ展開すると考えています。その場合東西の柱間は2.8m以上となるでしょう。柱穴は長辺が約0.8～1.1m、短辺が約0.5～0.7mの長方形で、柱の沈下を防ぐためか柱穴下層に礎板（木材）を敷いている様子がうかがえました。北端の柱穴が３世紀末～４世紀前半の溝に壊されており、それ以前の建物と考えられます。真北に対して西に約16～18°振っており、これまで検出している３世紀中頃以前の建物群や３世紀後半以降の建物（建物E）とは異なる方位をもちます。

写真５　建物Gの礎板（南から）

写真６　SD-1002（北から）

（２）溝・柱列

SD-1001・SD-1002・柱列２　SD-1002は南北溝で幅約2.5m、長さ20m以上、深さ約0.9ｍをはかります。多量に含まれていた土器から、布留０式期（３世紀後半）に下層が埋没し、布留１式期（３世紀末～４世紀前半）に上層が埋まったと考えています。正方位に近い直線的な溝で、真北に対して約２～３°東に振っています。SD-1001はSD-1002に直交する東西溝で、幅約0.8m、長さ6.6ｍ以上をはかります。SD-1002と共存していたと考えています。ただしSD-1001の方が先行して埋没したようです。柱列２はSD-1002の西側に平行して南北に伸びますが、SD-1001を越えて北側には伸びないと考えられます。柱穴の間隔は約2.0ｍで、大部分の柱穴で柱材やその腐朽痕跡を確認でき、抜き取り痕が認められる柱穴はありませんでした。特に南側から３つ目の柱穴では柱材が遺存しており、幅が約15～16cmの材を用いていることがわかりました。SD-1002と共存する可能性があります。

SD-1001・SD-1002・柱列２は纒向考古学通信第３号５ページで紹介しました、第170次調査で検出した３世紀後半以降の大規模な建物（建物E）と角度を一致させており、かつ溝の埋没年代（３世紀後半から４世紀前半）と建物Eの年代（３世紀後半以降）に矛盾がないことから共存していた可能性も考えられます。

SD-1006・柱列１　調査区北側で検出した東西溝で、幅約2.5ｍ、長さ10ｍ以上、深さ約0.6ｍをはかる東西溝です。調査区外の東西に続いていくと考えられます。SD-1006に土が堆積した後にSD-1002が埋まっていることから、両者は共存しないと考えられます。SD-1002との切り合い関係と土器から布留０式期（３世紀後半）に埋没したものと考えられます。真西に対して北へ約７～８°振っています。SD-1006の南側には、平行して柱列１が東西に伸びています。３間分を確認しており、柱穴の間隔は約2.9ｍとなっています。

写真７　柱列２の柱材

3. まとめ

建物Fの検出により、建物B・C・Dの東側にも同時期の建物が展開している可能性が指摘できます。建物Fが共存するとすれば建物群のエリアがより東にひろがるものといえるでしょう。またSD-1002・SD-1001と柱列2は、ＪＲ桜井線の西側で検出した建物E（第170次調査）と共存していた可能性が推定できます。推定が正しければ纒向遺跡辻地区には3世紀中頃以前の建物群以降にも建物と区画施設があることを示すものと考えられます。（森暢郎）

纒向遺跡北部の調査（纒向遺跡第181次調査）

1. はじめに

本調査は平成25年11～12月にかけて纒向遺跡の北部にあたる大字草川地内で行われました。この付近は現在、南北とも東西に流れる水路に挟まれており、古くからも河道に挟まれていた地域だと推測されています。

2. 調査の成果

南北2箇所に調査区を設けたところ、南調査区では中世頃の東西に流れる河道跡、北調査区では、溝や土坑などを発見しました。北調査区の土坑は古墳時代中期のもので、湧水層まで掘削されていることから井戸の可能性があります。中からは土師器甕、高坏などが出土しています。溝のうち南北方向にのびる2条の溝は、同規模で、一定の間隔で平行に掘削されていることから、耕作に関するものだと思われます。溝からは土師器皿や瓦器が出土しており、中世の遺構だと思われます。

3. まとめ

今回の調査区では纒向遺跡の最盛期である3世紀代の遺構をみつけることができませんでした。遺物も他の地点に比べて非常に少ないものでした。3世紀の集落の中心からは離れていることや、河道が近いこともあって、この地域が居住地としてあまり利用されなかったと考えられます。古墳時代中期になると土坑などの遺構が散見されるようになり集落域として利用され始めたと考えられます。おそらく地形からみて、調査区よりさらに北側が集落の中心となるでしょう。

その後、古代から中世にかけて、荘園開発が盛んとなると、この周辺一帯も耕作地として開発されたと思われます。このように調査によりこの周辺の土地利用の状況が確認できた事は大きな成果でした。（丹羽恵二）

写真8　調査区（北区）全景（東から）

写真9　土坑出土の遺物

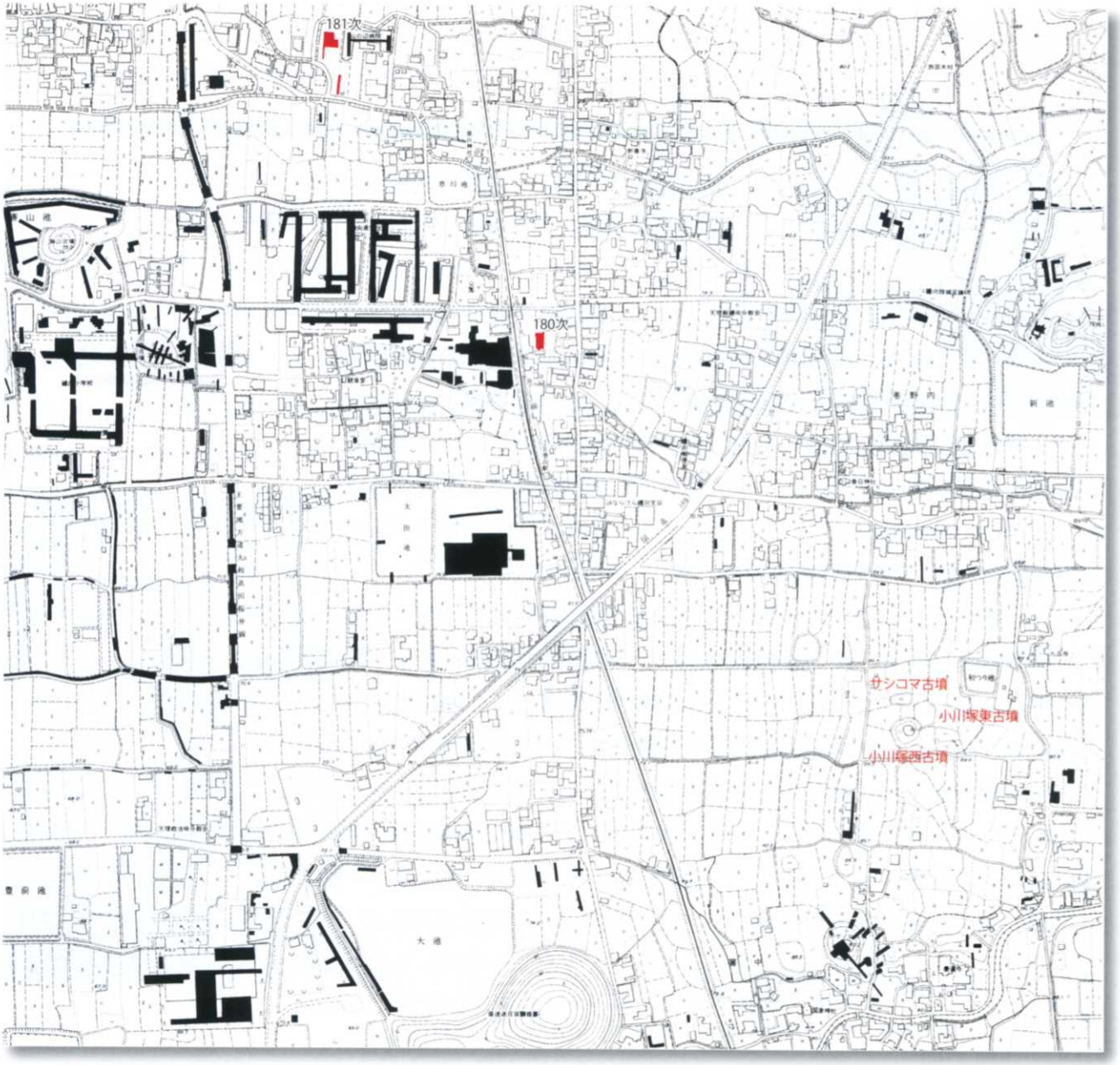

図１　発掘調査・測量地の位置（S＝1/7500）

纒向遺跡180次調査の現地説明会が開催されました！

纒向遺跡第180次調査の現地説明会が平成26年2月9日に開催されました。あいにく曇り空で寒い日でしたが、今回の調査では3世紀中頃以前の建物群と関連する可能性のある掘立柱建物を検出したこともあり、約1,700人と多くの方がお越しになりました。

当日は発掘調査地のほか、今回出土した土器や、建物の下に用いられていた礎板などをご覧頂きました。千数百年を経ても色鮮やかな土器や形を保っている木材に皆さん驚いておられる様子でした。

写真10　熱心に見入る見学者の方々

《纒向学研究センター研究紀要『纒向学研究』第２号が刊行されました》

桜井市纒向学研究センターでは、研究活動の一環として研究紀要『纒向学研究』を刊行しています。平成25年度は第２号を発刊いたしました。

今回の研究紀要では、纒向学研究センター共同研究員で大阪大学大学院文学研究科教授の福永伸哉氏と大阪大学接合科学研究所教授の近藤勝義氏の共同研究で「突線鈕式銅鐸破砕プロセスの金属工学的検討とその考古学的意義」、東海大学文学部教授の北條芳隆氏より「纒向遺跡出土の巴形石製品に接して」、福井県越前町教育委員会の堀大介氏より「古代ケヒ神の基礎的研究」、同志社大学大学院生の児玉駿介氏より「纒向遺跡における空間変遷情報の可視化」の玉稿を賜りました。

また、纒向学研究センターの所員からは、橋本輝彦主任研究員と共同研究員の奥田尚氏、奥山誠義氏の連名で「奈良県大淀町佐名伝　某家所蔵銅鐸の調査」として大淀町佐名伝で発見された銅鐸について、森暢郎研究員から「纒向遺跡出土の巴形石製品について」として纒向遺跡の範囲確認調査で出土した石製品について資料紹介がなされました。

今回の研究紀要も「纒向学」の名にふさわしく、考古学だけでなく金属工学や岩石学、材質分析の分野の先生方にも執筆いただいております。また、纒向遺跡のみに研究対象を絞らず、様々な地域・時代の論考を掲載しております。今後も研究紀要の刊行は継続する予定ですのでご期待ください。

なお、研究紀要は各地の図書館や大学、博物館、埋蔵文化財にかかわる機関に配布しているほか、今号８ページのとおり桜井市立埋蔵文化財センターでも販売しております。また、後日纒向学研究センターのホームページでも公開を予定しておりますのでぜひご覧ください。

《纒向古墳群の小川塚西古墳、小川塚東古墳、サシコマ古墳の測量調査報告が刊行されました》

写真 11　纒向古墳群と三輪山（北西から）

纒向考古学通信第４号６ページでご報告した纒向古墳群の小川塚西古墳、小川塚東古墳、サシコマ古墳の測量報告が刊行されました。『平成24年度国庫補助による発掘調査報告書』として、纒向遺跡第175次調査の報告などとともに掲載されています。

測量調査の結果、小川塚西古墳と小川塚東古墳は３世紀後半に埋まった川の跡の上に築かれていると考えられ、それ以降の築造である可能性が高いこと、小川塚東古墳は、円墳であるとすれば直径約48m程度となること、サシコマ古墳は古墳ではない可能性があることなどが指摘されています。

纒向古墳群は時期や墳形の解らない古墳がいまだ多く、今後も地道な調査が必要です。

《桜井市纒向学研究センター第２回纒向学セミナー「纒向王宮へのみち」を開催しました！》

平成26年１月25日（土）に桜井市立図書館研修室１で、纒向学研究センター主催、桜井市立図書館共催で第２回纒向学セミナー「纒向王宮へのみち」を開催しました。

今回は兵庫県立考古博物館館長で纒向学研究センター顧問の石野博信先生を講師に迎え、第１部では、石野先生に「纒向王宮へのみち」と題して、これまでの調査で得られた様々な成果を挙げながら、纒向遺跡で発見された大型建物群の意義や、纒向遺跡がヤマト王権最初の「都宮」とも考えられる理由などについてわかりやすくご講演いただきました。第２部では寺澤薫研究センター所長の進行のもと石野先生との対談が行われました。対談では、大型建物群の具体的な年代やその主となる人物像、さらには纒向遺跡に点在する天皇の宮殿伝承地との関連性などについて意見交換がなされました。

当日お越しの方々は石野先生の軽妙な語り口に、時折笑みを浮かべつつ、これまで約40年にわたって纒向遺跡の調査・研究を牽引してこられたお二人の議論に真剣に聞き入っている様子でした。今年度も纒向学セミナーは開催を予定しておりますのでご期待下さい。

写真 12　公演される石野先生

写真 13　宮殿伝承を語るお２人

《図書をご寄贈頂きました》

東北大学総合学術博物館教授の柳田俊雄先生と、桜井市内の市民の方より図書等をご寄贈いただきました。柳田先生からは計 334 冊、市民の方からは計 212 冊をご寄贈いただいております。寄贈図書は東北地方を中心とした各地の発掘調査報告書や近畿地方の市史等の郷土資料で、貴重な資料を多く含むものです。纒向学研究センターではこれらを整理し、平成25年度の研究センター年報に一覧を掲載しています。

なお、桜井市では平成23年にも纒向学研究センター顧問の石野博信先生より約２万1500冊の蔵書、写真資料等約７万枚をご寄贈いただいており、現在纒向学研究センターにて整理・保管しております。

今後これらの寄贈図書については桜井市・纒向学研究センターの研究・啓発活動に活用させていただきたいと思います。大変ありがとうございました。

写真 14　ご寄贈いただいた図書の一部

《纒向遺跡を掘る調査員たち 6》

桜井市の調査員の紹介コーナーです。このコーナーでは、普段はあまり知ることのない発掘調査や報告書の作成に携わっている人々について紹介しています。今回は箸墓古墳の周辺の調査や木製仮面を検出した調査を担当した福辻淳さんを紹介します。

福　辻　　淳（ふくつじ　じゅん）

桜井市出身で、考古学を学ぶ以前から纒向遺跡には特別な想いを持って育ちました。残念なことですが、現在の纒向遺跡は、必ずしも正しい評価がなされていないところがあるように思います。纒向遺跡は、多くの外来系土器が出土することと、古墳出現期の大型墳墓が複数存在することの2点をもって、その重要性が認められる集落遺跡です。しかし集落の構造や形成過程などについては不明な部分が多く、これに関する考古学的な検証は、現段階では十分であるとは言えません。

にもかかわらず、根拠が希薄なまま集落のイメージ像が構築され、それが定着し、半ば事実のように認識されてしまっている現状があります。こうしたイメージ像の提示は、纒向遺跡の存在を広く知っていただけるという効果がありますが、将来にわたって遺跡を保存・活用していく上では、遺跡の意義を正しく評価していくことがより大切です。今後はそうしたイメージ像にとらわれず、日々蓄積されている調査成果を冷静かつ論理的に見つめ、本来の纒向遺跡の姿を解明していくことが必要であると感じています。時間はかかると思いますが、これがわれわれに与えられた使命であると考えています。

埋蔵文化財センター展示収蔵室からのお知らせ

埋蔵文化財センター展示収蔵室では、平成26年9月28日（日）までの期間、発掘調査速報展20『50cm下の桜井』と題して、平成25年度に桜井市内で行われた発掘調査成果の速報展を行っています。今回は、今号でご報告した纒向遺跡第180次調査、第181次調査のほか、桜井市南部に所在する安倍寺跡の発掘調査や古代の墓を検出した高田遺跡の調査などについて展示しています。

開館時間：9:00～16:30（入館は16:00まで）　休館日：毎週月・火曜日及び祝日の翌日

入館料：大人200円 小・中学生100円（20名以上の団体は大人150円 小・中学生50円）

刊行物のご案内

纒向学研究センター紀要『纒向学研究』第２号　800円

ガイドマップ『改訂第５版 纒向へ行こう!』200円（2014年３月改訂）

※ご購入方法は　桜井市立埋蔵文化財センター内 公益財団法人桜井市文化財協会までお問い合わせください。

お問い合わせ先　TEL 0744-42-6005　FAX 0744-42-1366　http://www.sakurai-maibun.nara.jp

編集後記

今号では、纒向遺跡第180次調査の成果を掲載いたしました。この調査では航空写真撮影直前に雪かきをするなど、珍事にみまわれることとなりましたが、貴重な成果を挙げることができました。また、紀要についても第２号を刊行することができました。「継続は力なり」といいますが、今後も調査・研究を続けていく事が必要であると考えています。　(M)

纒向考古学通信　Vol.7

発行　平成26年7月31日

編集　桜井市纒向学研究センター

〒633-0085 奈良県桜井市東田339

ＴＥＬ 0744－45－0590

ＦＡＸ 0744－45－0590

ホームページ 纒向学研究センターで検索!!

纒向考古学通信は「卑弥呼の里・桜井ふるさと寄附金」を活用して作成し、ご寄付いただいた方に配布しています。